

# 真鶴学園風雲録

## Act3-2 継承者たち

### Red Sun & Blue Star.

ゴールデンウィーク明け辺りから、どこことなくゆるんでいた学校内の空気も、適度に緊張を取り戻しはじめた。男女対抗戦が目前に控えており、いつもより遅れたとはいえ結局は決行されるとあれば、無理もない。

いかに真鶴模型部のモラルが栗田姉妹によって維持されていたとはいえ、模型部は彼女達が入学する以前から存在していたし、真鶴が強かったのも単に栗田姉妹がいたからだけでは無い。言わば彼女達、あるいはその一派は単なる触媒であって、「真鶴模型部」そのものが要素を秘めていなければ何の効果も無かったであろう。

要するに猛訓練が始まった。遅まきながら。

菅原絵馬はアイオワ級の広々とした艦橋で、新入生の駆逐艦を従えて初雁の艦隊を追っていた。戦艦同士との殴り合いになれば、速度で優る菅原たちの方が圧倒的に有利である。何しろアイオワは駆逐艦並みの30ktで飛ぶように動きまわる事が可能である。対する初雁の艦は大和級、どう頑張っても26ktがやっつである。一発の威力は大和級の方が勝るが、発射間隔はアイオワの方が短い。つまり時間あたりの弾丸の総重量はアイオワの方が優る。射程距離はあまり変わらないから、速度を利用してより優れた射撃位置を占め、さっさと逃げの方が損害が少ない計算である。菅原もその点は充分に承知していた。

だけど、相手が相手だからなあ。

初雁は機名の流れを汲み、どちらかといえば兵器の性能よりもそれを操る人間の性格で戦う。明らかに嫌らしい手口なので相手にしたくない奴ナンバーワンであることは疑いない。現に個艦だけでなく艦隊戦力の比較でも菅原に分があったにもかかわらず、勝率は五分。ファイトをかき立てると同時にやる気をくじく数字ではある。

まあ、ここでくじけちゃいけないんだよな。

なるべく前向きでいようとする菅原ではあった。そして彼の艦隊は、欲以外は手放して認める「男子部最強」の水上戦闘艦隊に育っていた。

### 〇い彗星

空においても緊張の度合は高まっていたが、それは別の要因のために海のそれとは比較にならない加速度で高まっていた。ニアミスどころではない、手荒な飛行を繰り返すものが現れたのだ。「荒いF-4」の話は瞬間に女子部じゅうに広がった。衝突しかねない勢いで格闘戦を挑んできて、一発も撃たずにこちらを失速させる。安全装置のおかげで、よほど対地高度が低すぎない限り復帰するからよいが、空戦中の意図しない失速は

理論的には撃墜とほとんど意味が同じだから、これは恐ろしい事であった。パイロットが坂井である事はいうまでもなく、その事も当然周知された。

その坂井法子は菅原と逆に、実は下り坂一直線だった。明日が無いかのような勢いで落ち込んでいく彼女を、周囲は更に避けはじめた。同室の初雁でさえ、幾度となく繰り返す坂井の鬱にはどうとうさじを投げてしまった。しかし彼女はその事態を打開しようとはせず、かえって自前のF-4から後席を取り払ってしまい、空では更に自分を孤独に追い込んでいた。

孤独は彼女を変えた。

少なくとも空においてはそうだった。

皮肉なことに彼女が望んでいたのは「閉鎖」だった。MFの「墜落」ぶりを見るに見かね、自分がその「礎」になろうと決心したゆえの行動ではあったのだが、果たしてそこまでやる価値があったかどうか。MFは確かに団結した。しかしその姿は「勇敢」を体現したものではなく、.. .むしろ「弱気」そのものの方がびつたりだったろう。寄りは大樹の陰、という訳だ。明らかに坂井はやりすぎた。

「荒いF-4」の話は瞬間に女子部じゅうに広がった。衝突しかねない勢いで格闘戦を挑んできて、一発も撃たずにこちらを失速させる。空戦中の意図しない失速は理論的には撃墜とほとんど意味が同じだから、これは恐ろしい事であった。塗色がごく当たり前の灰色で、外見上まったく識別できないのも恐怖であった。おかげでF-4乗りの間では逆襲を恐れて「自分は違う」とばかりに、個人的に派手なマーキングをつけることが流行した。それは自衛のためになるべく集団で飛ぶこととあいまって、さながらベトナム戦争直前の米軍機のようなありさまになってきた。殊にそれは女子部の中で顕著であった。シャークティースなどは序の口で、中にはピンク色のものや黄色と黒に塗りわけ、さらに「猛虎轟進」などと翼に大書するものまでいた。もっともこれは目立ちすぎるので嫌がられ、すぐに消えた。人気が高かったのは機体を猛禽類に見たてて青または赤系で濃淡をつけて塗り分けるやり方である。中でも「鷲」は数が多かった。

もちろん、「敵」のパイロットが坂井である事は想像に難くなく、その事も誰言うともなく周知の事実となっていた。MFの誰もが彼女を負かせないことを悔しがり、いらいらを募らせた。

### Enlist Now!

男子部もこの「荒いF-4」を警戒してはいたが、坂井が女子部の人間であるだけにその残存率は比較的低かった。お互いの領域を「なるべく」犯さないのが双方にとって暗黙の了解化しており、

安心できたのである。その安心には何の裏付けもない事は、無意識に無視された。

だからこそ山本九十九も、機動性には富むが速度で不利な（＝逃げられない）レシプロ機で空中機動の練習にはげむ事ができたのである。もっとも男子部の備品をアデにしているは零式戦のように「軽快」な機体は入手難で、A-1 が限度だ。

人込みにほとほとうんざりした彼は、活動のない日も裏山の開けた辺りで草むらに寝転んだりして「静かに」過ごすようにしていたが、A-1 で低空を飛ぶのもまた悪くなかった。少なくとも下手に高いところを飛ぶよりはすいていたし、安全だった。

橘 清華も、やはりマイペースで空戦機動の「自習」に励んでいた。例の荒い F-4 に狙われるのも一再ではなかったが、別に構わなかった。それなりにスリルはあったし、別に命を狙われるわけではなかったからだ。

「荒い F-4 」を別にすれば、よく彼女の相手になったのは天野 麗奈の A-4 である。同一機種ということもあって攻め易かったし、どうも相手も持っているような節があった。同じような時間に同じようなところをいつものんびりと飛んでいる。勝った次の日ならともかく、負けたときも同じなだから、何をかいわんや。まして相手はなかなか意を突かせないのである。

もっとも、橘がどちらかという戦闘機志向で、高度を利用しながらスピードを稼ぎ、機体に「縦」に振り回すのに対し、天野の方は攻撃機志向なのか、低空でもっぱら機体の敏捷性を使って「横」に振り回す癖が有るようだった。やたらと低く飛ばれると、「縦」の空戦は危険である。何となれば自分が墜落しかねないからだ。大概の場合はそんなわけで、勝率は五分だったが、主導権は天野が握っていた。

その天野。放送委員会からのアプローチは相変わらずしつこかった。．．．が、それも対抗戦を目前にして、散漫さが見えてきた。一方では「坂井対策」で警報のために人手を割かねばならなかったし、第一天野がなかなか煮えきらないので、勧誘に当たるものたちがあきらめかけていたのだ。しかしそれでも、委員長以下「上」のものは天野の勧誘に熱心だった。「役に立たない」一般の委員に見切りを付けた彼らは、ついに最終兵器を投入する事にした。

早坂である。

To be, or Not to be.

舞台は変わって。

ある晩坂井が部屋に帰ると、宇垣が戸口で待っていた。

彼女はちょっと会釈するや否や、宇垣にものすごい勢いで殴り倒された。

「馬鹿野郎！」宇垣の怒気はその語気が裏付けた。「てめえ、いつからそんないじやけちまったんだ！

立て、貴様のその性根、叩き直してやる！」

唐突さと理不尽さにたちまち「怒ゲージ」が振り切れた坂井だったが、反論する前に胸倉をつかみ上げられ、もう一発襲ってきた。唇が切れて口

の中に塩味がしむ。

薄暗がりの中ではつきりは判らないが、宇垣は顔を赤黒く染め肩で息をしながら、おもむろに語りだした。

「はるなはなあ、はるなは．．．おまえにそうなるように言ったのか．．．？」

坂井は殴り倒されて床に腰を落としたまま、何も言い返す事ができなかった。今はそんな事よりのこの事態への怒りの方が強かった。

「無抵抗の連中に辻斬りかまして、それで強くなつたって言えるのか！ええ！？」

まだ抗議の目で見上げている坂井をもう一度つかみ上げようとした宇垣は、しかしかがみこんだ途端、急に力を失ってへたり込み、激しく咳き込みはじめた。ただならぬ様相に坂井もさすがに助け起こそうとしたが、それは思い切り突き飛ばされて拒まれた。

ひとしきり咳き込んだ後打って変わって蒼白になった宇垣は、この言い残して部屋を去った。

「まいた種は自分で刈れ」

始まりと同じに唐突な幕切れだった。この人と来たら、どうしていつもこう！

やがてどこからかごぼごぼと泡立つような音が聞こえてきたが、怒り心頭に達していた坂井には、それほど気にならなかった。

夕方遅くなって、初雁が部屋に戻ってきた。菅原とのつながりでもそれなりに不満はないはずだが、部屋に戻ったときの彼女は前以上に憂鬱に見える。原因が坂井自身にある事が分かっているだけに却って顔に障るが、彼女は無視することでそれに耐えた。

「何、これ！何があったのよ！」

開口一番初雁が言ったのがそれだった。彼女がかがみ込んでるところへ目をやると、赤黒く固まった血が点々と床についている。

「さあ、ね」

そっけなく答えた坂井だったが、やがてピンと思い当たった。

でも、まさか、ね。

#### First Contact.

食堂で、早坂がはじめて天野の前に姿を見せたのは同じ頃だった。校章は中学生だったがどうも普通の中学生とは雰囲気が違う。昼放送で彼女の事は知っていたが、放送の時の「浮いた」イメージとは違い、はつきりとは判らないが、「変な落ち着き」を持っているように天野には感じられた。警戒させるには十分だ。

「委員会に入ってなんて言わへんけど」単刀直入に早坂は切り出した。「七不思議には興味あるやろ？」

怪しい。頭では判っている天野だったが、自分が知らない事を相手を知っているのは我慢がならない性質である。話の先手を取られたのも引掛かった。

「七不思議？」

「そや．．．例えば、裏山の爆発とか」

早坂は紐んだ手の上にあごをのせ、くすりと微笑んだ。これだ、これが中学生らしくないんだ。天野は思ったが、なるべく表情に出さないように

努めた。

しかし、「裏山の爆発」は調査中に温泉を掘り当てたからではなかったか？

「アレな。うち、知ってるで」

にったりとしたまま早坂は間を置いて、相手の反応をうかがう。天野はごくりと唾を飲み込み、待った。

「あの下に日本軍の船が埋まっててな。自爆したんよ」

「アホらしい！」

次の瞬間、天野は椅子を蹴って立ち上がり、トレイをつかんでいた。

山の下に戦艦？人を馬鹿にするにもほどがある。

でも、火の無いところにはナンとやら。早坂の手を借りずとも、その「裏」にあるものは見えるかもしれない。それはそれで、「〇一」みたいで面白そうだ。しかし彼女は、頭の中に鳴り響く警報をオフにする気には、到底なれないのだった。

### 大空の流浪人

翌日、坂井は空に上がり、無線で誰にもとなく宣言した。

「一度でも「撃墜」されたら、空を降りる」

彼女なりのけじめの付け方のつもりだったが、MFに与えた衝撃はすさまじかった。それまでの経験からいって、空で彼女に対抗できるものはいないことが証明されていたからだ。この発言は「思ひ上がり」と受け取られた。次の瞬間から彼女の空での挙動はほとんど全数の AEW 機と地上レーダーから集中的にモニターされた。それは徹底したもので女子部のみならず男子部とも連携しており、彼女の針路上にいるものには即座に警告が発せられるようになった。主として小田原水産から様子をつかがいに来る「スパイ機」の警戒がおろそかになったが、そんな事は言っていられない。今は無闇に撃墜数が増えて、士気と練度が落ちる（落ちればその分飛行時間は短くなる理屈だ）のを防ぐ方が先だ。もちろん、彼女の首を掻こうとする無謀なものなど一人としていない。

「馬鹿が．．．」

エセックス級空母「神田」で宇垣は一人、呟いた。自発的にニミッツを降りてエセックスへ移った彼女だったが、その時はそのことを忘れていた。だから誰にも聞かれていないつもりだったが、狭いエセックスの艦橋では全員がその呟きを耳にしていた。

そんなことは気づきもせず、彼女は無線を取り上げた。

ほんの衝動から瞬間的に計画が立案され、実行に移された。

### Over KILL

対抗戦当日．．．

早朝初雁は、今まで自分たちが作ってきた「操車場」が、実はそんなものではなかった事を知り、愕然となった。今日の前に有るのは、貨車などとは似ても似つかない。長物車に下回りは似ているものの、上回りは完全に大砲．．．要するに列車砲なのであった。

なるほどね。だから広軌一標準軌！一だったのか。並んでいるのは 28cm50 口径砲を積んだやつで、射程はここからなら男子部の陣地中心を充分狙えるはずだ。一番端の方で一両だけコンクリート・ミキサのお付けみいたいのが腰を落ち着けていたが、陸戦兵器はさほど知らない彼女にはよく解らなかった。あれ一体なに？

しかしそんなことよりも、彼女は自分が船以上に愛していた「鉄道」が直接戦目的に使われることが、そしてそのことが自分に伏せられていたことが悔しくてたまらなかった。知っていたらこんなことには手を貸さなかっただろう。生徒会がそれを知っていてわざと教えなかったことにはすく気がついたが、それが余計に腹が立った。

第一、自分と同じく、それ以上に鉄道を愛している部員たちに申し訳が立たない。

まもなく部長職を退く身ではあったが、対抗戦が終わり次第、できるだけ早く身を退く決意を、彼女は固めた。責任は取らなければ。

戦いの幕が切って落とされた。今回はお互いに事前の動きを積極的に読もうとしていなかったので、「予想」が確実には成り立っていない。結局「今までと同じさ」ぐらいの構えていた。しかしまったくのあてずっぽうというわけにはいかない。

今年の女子部は火力を重視、というか過度に偏重していた。策略の面で男子部を圧倒できない（と思われる）以上、火力を積極的に押し出して押し潰してしまおうというのだ。だから去年まではどちらかという後方に構えて包囲殲滅戦を図るのが常だった女子部の戦艦隊が、今年はその他を脇にやって先頭に立ち、中央突破に出ていた。今まで先陣の花形だった水雷戦隊は後方につき、半殺しにされた敵艦を始末する作戦である。手負いの獲物に食らいつくピラニアのイメージだ。

火力重視の最たるものが、若宮の「重ミサイル化」巡洋艦構想で、これは女子部 MS に制式採用され、評価テスト用に四隻が作られ、投入された。具体的には「重雷装型」5,500t 軽巡の雷装を全て取り払い、代わりにトマホーク用の四連装 ABL を積めるだけ積もうというもので、射界を確保するために横向きに取り付けた結果、多少張り出しができて耐波性に問題がでたものの、ABL 五基、計二十発を装備できた。もちろんトマホークは対艦用のそれである。さらに原計画に加え、備砲の 14 cm 砲も中心線上の物はシー・スパー SAM に交換、艦橋両脇のそれはファランクス CIWS としてそれなりに対空自衛力を備えた。電子装備もそれに応じて強化してある。これが後方の空母から来る電子戦機の支援を受けて戦艦隊に同行したから、全体としての破壊力は推して知るべしであった。実際、総計八十発に及ぶトマホークの総攻撃は凄まじく、最初の接触の後、先鋒に位置していた男子部艦が無傷のものはほぼ絶無と言ってよかった。ただし、男子部は慎重を来して前後半分ずつ分散した配置を取ったので、のっけから厳しい戦いを強いられる事になったが見込みが無くなった訳でもなかった。重ミサイル艦を指揮したのが榛名、

あるいはせめて初雁だったなら、一度にミサイルを使いきるような真似はしなかっただろう。しかし不幸にしてそうはならなかった。天でさえ人に二物は与えない。まして戦力配置を行うのは生徒会、もちろんただの人間だった。

上空では第一次制空戦が始まった。

一度空戦が始まってからの坂井は、今までに輪をかけて暴れまわった。

「一度でも「撃墜」されたら、空を降りる」

彼女にとってそれは、命を賭けたのに匹敵する重みを持っていた。彼女から「空」を取ったら何も残らない、少なくとも坂井自身はそう思っている。だからこそ彼女は能力の限り敵機を追い回し、逆に敵は寄せ付けなかった。好んで寄り付こうとするものなどいなかったが、F-4 は時々酷使に抗議するように小刻みな振動を見せたが、おおむね乗り手に従った。．．．彼女は常に空にあった。否、ありすぎた。

気付いた時は手後れだった。

気配を察して振り向くや否や、彼女の背後は赤黒い煙に包まれた。

雲？

そんな言葉が過る間もなく、彼女は空に放り出された。

「良かったのやら、悪かったのやら」

初雁は頭をかいた。一部始終を彼は旗艦「白鶴」のレーダー・スクリーンで追っていた。頼まれたこととて、ここまでやる必要があったろうか？ 護衛の「こんごう」級イージス駆逐艦から、スタンダード SAM を全数、90 発。正気の沙汰じゃない。全弾命中はさすがイージス・システムだが、たかが F-4、2 発以上はいくら命中しても効果は一緒。わざわざ手動にしてまで、．．．いや、今は他にやることがある。

「トンボ釣り、お願い」

彼女は無線で連絡すると、今落とした「友人」のことを頭から追いついた。そろそろ男子部艦隊の後半が来る。

野木坂の列車砲は序盤から景気よく弾丸をばらまいていた。がいかにせん趣味の産物である。目標もともすれば趣味に走りがちであった。大体が弾着観測機も趣味の産物で、カ号観測機（オートジャイロ）など他に誰が使うだろうか。あまりにも遅く、低すぎるのでジェット戦闘機では狙えず、小さく、放射熱量も低すぎて SAM でも照準を付けられない。とりあえず気を付ければいいのは地上からの銃火器だけだが、これとて羽布張りのボディは大概のダメージを貫通で済ませてしまうので、タンクに火がつかない限りさほど怖い訳でもない。正に無敵。

菅原はそれまでもそんな坂井を目にしたことはあるが、その時ほどあんな一言が脳裏に強く焼き付いたことはなかった。

無残。

馬鹿だな、何でそんなに単独行動を取りたがるんだ？

何度となく彼はそう聞きかけたが、そのたびに止めた。答えは判っていたからだ。少なくとも彼自身はそのつもりだった。それにしても、．．．後席手とは言わない、せめてウイングマンがいれば、もっと早くミサイルに気付いただろう！ そうすれば坂井のことだ、もしかしたらミサイルが倍でも、かわせたかもしれないのに。しかしそれをしないのが坂井で、菅原はそのことを理解しているつもりだった。しかし原因が分からない点で、彼は根本的な誤りを犯していた。ただの高校生にすぎない彼にそこまで期待するのは無理だろう。

坂井は「あきたこまち」の艦橋の片隅で、膝を抱えてうずくまっていた。何も言わず、ただじっと床を見つめているだけ。

やばいな。

直感的にはそう思う。何とかしてやりたいが、しかし、下手に手を出すとかえって傷口を拡げるだけだと思っただけの分別は、充分に持っている。

「AEW から連絡、女子部の先鋒がこっちのハーブーンの射程に入りました。．．．女子部のレーダーを探知、触接されました。．．．女子部の戦力は、．．．すげえ彼はため息をついたが、菅原に見られているのに気付いて気を取り直した。「艦艦が三十隻以上。あいつら手持ちほとんど全部、ここに突っ込んでやるが！」

無線係の報告で、彼は目前の問題に集中する事ができた。

「まだ手を出さな。主砲の有効射程まで待つ。敵さんのミサイルに気を付けろ」

菅原は彼なりに、今回の対応を練っていた。先陣がトマホークで一瞬にして壊滅に追い込まれた事を考えると、相手は索敵、防御ともかなり強力な電子戦能力を備えているに違いない。いつの間、この思いも強いが、まさか旧式軽巡のお手軽改造で打撃力を近代化しただけでは知る由もないから無理もない。

特に必要もなかったが、無線で指揮下の全艦に伝えた。

「みんなも聞いたと思う、そろそろ女子部の先鋒と接触する。多分相手の第一撃はミサイルだろう。先陣が食われたのと同じ奴だと思ってい、かなり手強いぞ。寸秒を争う対空戦になると思う。．．．ただし第一撃さえかわせば、後はただの砲戦になるはずだ。気にせず守りて行こう。勝手に沈むなよ。以上」

実際、女子部は第一撃が済んでしまうと、ただの砲戦しかできないのであった。その一撃は先鋒を潰すだけで使い果たされた。トマホークの洋上補給は事実上不可能である。女子部今年のびっくりどつきりメカ・重 SSM 艦は単なる直掩艦に成り下がっていた。

なお女子部からミサイルによる攻撃がない事は、男子部の誰もが不思議に思った。既に男子部では断続的、かつ計画的にタイミングを計りながらハーブーンを女子部へ叩きつけている。今までのところ専科にたいしたことはないが、来るべき山場、戦艦の主砲戦への地ならしにはちょうどよいレベルだ。

「もしかして、ミサイル使いきってたのか？」

菅原はふと思った。初雁ならそんなあからさまに馬鹿な真似はしないだろうが、女子部の主将は初雁ではない。そして重ミサイルの飽和攻撃は初心者でなくとも心懸かれる戦術だ。「予算」の足かせさえなければ、ちよとしてたはずで誰でも手を出したくなる。そして DM に「予算」の二文字はほぼなきに等しい。第一金を払うのは学校だ。そうか！

「全艦、最大戦速！」

菅原はいても立ってもいられず、すぐに体勢を整えた。女子部にトマホークは残っていない。彼は早くも確信していた。そしてハーブーンはトマホークより迎撃し易い。事態に気付いた仲間たちが菅原に続く。

「やっばあ」

初雁は艦橋で額を叩いたが、それで何がどうなる訳でもない。

前方に「あきたこまち」を先頭に立てた男子部の戦艦隊が姿を見せ、白波を蹴立ながら全速で真正面から女子部艦隊に突っ込んできとときの彼女達の反応は、パニック以外のなにものでもなかった。大概の者がヒステリックに砲という砲を撃ち放ち、おかげで艦ごとの照準修正が困難になり、当然ながら命中率は悲惨なほど低下した。立ち上る水柱の派手さと裏腹に、男子部の被害は絶無に等しかった。これもまた火力偏重主義の持つ欠点の一つで、かつ最大の物だった。たとえパニックにかられていなくとも、どの水柱が自分の物か判らなくなるのだ。この事が更にパニックを加速した。

女子部の火力集中は本来男子部に駄目押しの一撃を加えるための物のはずだった。ミサイルでぼろぼろになったところへ主砲でとどめを刺し、弱いものいじめを存分に味わった上でおもむろに上陸戦を展開。しかし男子部艦隊は、半滅しているとはいえなお十分な戦力と士気を維持したまま、女子部本隊に殴り込みをかけてくる。彼らは統制を維持した分だけ戦果も上がり易かった。「艦隊左翼に抜ける」

彼女はこの混乱を何とかしようと独断で動く事にした。既に中枢部は取り乱してしまっていて、言う事聞かない方が余計危ない。彼女の独断専行は更に女子部の士気統制を混乱に陥れたが、もはやその事実には彼女は目をつぶる事にした。馬鹿と心中はできない。

男子部は菅原の知力に力を借りて、海上では女子部を圧倒しつつあったが、陸上では一握りの列車砲のために崩壊寸前の状態にあった。こんな事は事前に全く予想されていなかった。しかし手を焼いていたのは男子部だけではなかった。女子部の MA もまた、この猛火力には閉口させるをえなかったのである。序盤は良かったが、戦局が進展して彼らが奥へ進むに連れ、とてつもないクレーターがまず軽装軌車両の足を止めた。ついで間断ない大口徑砲の雨が、戦車の足も止めた。危なく入れないのである。

戦車隊は何度も砲撃を止めるように要請したが、それは MS に対しての物で（確かに破壊力についての判断は正しかったが、誰かが 28cm、あるいは 60cm 級の野戦砲があるなど知ろうか？）列車砲には届かなかった。学校という社会の中では横のつながりも十分に強く、それが事態の混乱にさらに輪をかける結果をうんだ。

陸路侵襲隊は事実上足留めされたまま、試合終了を迎えることになった。

海上の乱戦は更に泥沼化していた。両軍あわせて 50 隻近い戦艦が至近距離から大口徑砲で血みどろの殴り合いを演じ、さらにそれに空母からの艦載機、遅れてやってきた中小の艦艇が加わったから推して知るべし。

菅原もまた混乱を抜けるべく左翼に抜け、時計回りに戦場の外周を回り、適当な目標を見つけてはカモにしていた。お互いに知らなかったが、初雁と菅原は同じ円周の反対側を回りつづけていた。

模型部始まって以来といわれる凄絶な、かつ醜悪な状態で、今年の男女対抗戦は終わりを告げた。判定は引き分けてあった。

## 学校の花子さん 2

対抗戦が空前絶後の泥仕合に終わってからというもの、男子・女子を問わずやり場のない怒りが蔓延し、ことに寮の中では倦怠感が満ち溢れていた。加速度的に規律は低下し、以前は床にチリーつない事が自慢だった校舎でも、徐々にわた埃が目立ちはじめた。

普通なら個々で宇垣一家の出番になるのだが、今回は事情が違った。若宮が一足先に校内美化に手を付けはじめたのだ。彼女には「次期生徒会長」の野心が芽生えていて、素のための地均しの意図もあったのだが、一般生徒はそんな事とは気が付かず、奇特で便利な奴程度に受け取っていた。若宮は校舎といわず寮といわず、汚れを見つければ直ちに処理していった。その姿は掃帚で洪水を止めるのにも似ていたが、宇垣一家が見かねて動きはじめるようになって徐々に事態は改善されはじめた。

ある日若宮は「開かずの間」の誉れ高い寮の空き部屋の戸を勢よく開け放った。

開け放って、目を疑った。

部屋はきれいであった。のみならず、あたかも誰かが住んでいるかのように、小物がきちんと整理されていたのである。部屋の主は几帳面な性質と受け取れた。部屋を間違ったかな、そう思って確かめたが間違いない。だとすると誰かが別荘代わりに使っているか、新しい住人が来た事になる。そんな話は知らないが。

．．．失礼しましたあ。

若宮は戸を閉め、他の場所に向かった。

中間試験が始まった頃には校内美化はあらかたカタがついていた。

## Be.

試験が済んで結果が発表されると、坂井は改めて愕然となった。

初雁が勉強ができるのは知っていた。しかし宇垣もそうだと知らなかった。もちろん宇垣にとっては二回目になる試験である、できなければ嘘になるが、全科目の平均点が95点とあってはそれだけでは説明がつかない。典型的優等生の栗田艦隊で高位をキープできた理屈である。どう考えても宇垣はがり勉タイプではないから。．．．坂井は改めて「格の違い」を意識せざるをえないから。自信喪失などというレベルではない。たかがSAM ごとに落とされたのも悔しいが、自分は一体今まで何のために生きてきたのか。生きる事の根本を見つめなおさざるをえない坂井だったが、しかしなおやつれる一方の宇垣の姿に垣間見える「死」の陰にも気付いていて、それが彼女に自殺を思い止まらせる遠因になっていた。少なくとも自分にはこのからだがある。五体満足に機能する、自分自身がある。

### 大雲界

「やっぱり話した方がいいのかねえ」  
学食の茶をすすりながら、初雁は遠い目で首を傾けた。菅原から彼の考えを聞いたばかりだ。菅原は「碓＝巴御前」であることを雪風の関係者に明らかにした方がいいと思ったのだった。何故、今、御前が姿を変えてこの世にやってきたのか？まだ雪風をめぐる問題を片付いていないのはいか？それが判らない事には安心などしてはられない。

「問題は坂井さんだけど」  
「そうだねえ」  
相変わらず初雁は遠い目のままだ。ちえ、まだ対抗戦の事、根に持っているかな。菅原は少しへそを曲げかけた。時間が経つに連れて男子部 MS の逆転の立て役者が菅原である事は知れ渡るようになっていたし、初雁が女子部があまりにみつともない負け方をしたのに腹を立てているのもまた事実だ。

「私が今思うには、私ら雪風に引導渡したわけじゃない？理由はどうあれ。最期も看取った。形はどうあれ。もう、私ら雪風に対しての責任は果たしたと思うけど」

「そうかな」菅原はやんわりと、しかし確かに反論した。「たとえ形が変わっても、雪風はあの洞窟にいるんだ。そして僕等はこちらにいる。できるだけの事はしてやるのが供養になるんじゃないかな。それに引導を渡したからってそれで縁が切れるなんて、そんな、つばめらしくない」

思い切って菅原は名前、それも呼び捨てでかかった。今まででは照れ臭くて苗字さん付けで呼んでいたのだから大冒険もいいところだ。初雁は腕組みして考え込んだ。もうひと押し。

「御前が碓先生に生まれ変わった。これが何かのサインじゃないか、知りたいと思わない？」  
「私は知りたいと思わないけど」初雁の語気に菅原は一瞬観念したが、続く一言で安堵した。「付き合ってもいいわよ」

負けを認めたくないんだらうな。彼は思った。彼もそうだが、初雁は勝てる勝負で負ける事を一人倍嫌い、主導権を握られる事をもっと嫌う。最高に嫌いなのは先手を打たれる事である。

「待っていましたよ」

体育教官室の応接セットに腰をおろした碓は微笑んだ。放課後の事で他に人はいない。きしむ音からいっても明らかに安物のソファだが、碓の姿がそれに加わるとちょっとはマシに見えるから不思議だ。

結局集まったのは四人。菅原、初雁、アーティ、そして朝比奈。結局坂井には声をかけない事にした。「不安定で、危険すぎる」というのが初雁の意見で、誰もがそれは認めた。誰だって好きで崖から人を着き落としたりはしない。

「そろそろ来ると思っていました」  
碓は静かにそう言うと、うながすように菅原を眺めた。言い出しっぺが菅原であることを早くも見抜いているようだった。

「何故、生まれ変わったんですか」  
単刀直入に菅原は切り出した。事前に聞いていたとはいえ、性急な切り出しに朝比奈が嘩然となって菅原を見つめる。構わず菅原は続けた。「雪風をめぐる争いには決着がついたはずでしょう。当の雪風、あなたが自分で進む道を選んだことで」

菅原は沈むとか、死ぬとか、そんな表現はなるべく使いたくなかった。  
「如月も消えた。先生は何が目的で、この世に戻ってきたんですか？」

「如月は消えたわけではありません」静かに、そして冷たく、碓は論すような口調で答えた。「今なお如月の魂は、この真鶴にいるのです」

朝比奈の顔から血の気が引いていく。アーティは何事か呟きながら胸のあたりを両手で固く握り締めた。多分十字架だろう。

「．．．どういふ．．．」初雁がうめくように口を開く。「．．．事ですか．．．」  
「如月にとっては今まで何度もやってきたことです」

碓の口調は憂いを帯びていた。話が話だがそれだけでもあるまい。

「憑依、という言葉を知っていますか」  
一同息のみ、凍り付いた。丹波哲郎だけかと思っていた。

「今、如月まどかとは放送委員会の早坂理絵に乗り移っています」

そういえばみな、思い当たる節があった。年度が変わってから、早坂の「ノリ」には微妙な変化があった。どこと具体的に言葉えないが、そう．．．どこか変なところに、彼女の脳天気さにはそぐわない「余裕」が感じられる、といえは近いかもしれない。

「今まで皆さんは雪風を守ってきました。しかし如月が支配を狙っていたのは雪風だけではなかったのです」

みな、碓が何を言っているのかわからなかった。「横浜に、秘密の二式大艇が保存されています」碓は続けた。「日本最初の、そして最後の原爆格載機です。弾頭は満州から輸送の途中、日本海で輸送船ごと沈められました」

全員ただぼかんと聞くことしかできない。「今までそれを守ってきたのは栗田の妹です。引き継ぎはなされていません」

「私たちは」ようやく初雁が口を開く。「何も聞いていません」

「そのはずです」碓はうなずいた。「この事は栗田の姉も知りません」

「じゃあ一体どうして僕たちに」

菅原は聞きながら、さらに深みにはまっていく自分に気づいていた。碓のところへ北湖とが、今更ながら悔やまれる。自分はただ平和な学園生活を送ってきたはずなのに！

「もう、つきあってられないネ！」アーティがやにわに席を立った。「アタシ、降りるよ。ユーレイはラフカディオ・ハーンだけでたくさん！あとには勝手にやったらイイね！」

言い捨てると、荒々しく部屋を後にした。朝比奈もついて行こうとして、タイミングを失いまごつた。初雁も止めようとしてタイミングを失っていた。碓は落ち着いていた。

「いいのです」あくまで碓は冷静だった。「敵に正面から向き合うのも大変な勇気が要りますが、背を向けるのも負けず劣らず勇気が要るものです」

三人は顔を見合わせた。これから、どうする？「まだ考える時間はあります」碓は告げた。「これからどうするか、後悔のないようゆっくり考えなさい。先を知るのはいずれからでも遅くはないでしょう」

#### Naval Holiday.

6月になって、男子部MSに撃沈された分の代替艦船が到着した。今回は損害の分だけ大量に導入することになったが、中でも目玉はアイオワを超える二種類の戦艦である。モンタナ級と「13号艦」が10隻ずつ。あまりにショッキングだった女子部の火力集中策を二度と取らせないために購入

した物で、言わば「遅れてきたヒーロー」だった。女子部は特に男子部初の46cm砲艦である「13号艦」に少なからぬショックを受けたが、既に大和級という46cm砲艦を十分すぎるほど擁しているだけにまだ余裕はあった。

「...すげえ...」

100隻近い新型艦が港に船先を揃えるのを目の当たりにして、菅原は思った。彼らにとって対抗戦はすでに過去のもの、女子部と彼に見えることははやないが、まだ小田水との対外戦がある。どうせ内連生が持っていてしまうだろうが、もしももらえるものなら強いやつがいに決まってる。機敏でタフなハードパンチャー。アイオワの合理性に満ちたスマートさに見慣れた彼にとって、拡大型のモンタナ級は実に魅力的に映った。それに引き換え、米軍艦がほとんど男子部内で唯一の日本艦、「13号艦」はひどく場違いな印象を受ける。その「45口径46cm砲」が「50口径40cm砲」と能力的に大差なく、便所の100W的な存在であることを知る菅原には、どうしても「お呼びでない」としか思えない。ガスタービン艦と見紛うばかりの肥満した煙突。不格好に積み上げられた艦橋。野暮っぽいほどフラットな甲板。どうひいき目に見ようとしても強そうには見えない。初雁が地団太を踏んで悔しがるのが彼には理解できなかった。

物事は一度おかしくなり始めるととことんまで狂うものである。

菅原はその翌日、「13号艦」の艦長に移ることになった。対抗戦の戦績を買われたのだ。遅すぎたが、それでも外連生としては空前の大抜擢だった。初雁の低気圧が更に進行したことは言うまでもない。

To be Continued...

#### 校長日誌

まずは近況報告から。

とりあえず生きてます。

でもって卒業しました。「6336」の冗談が本当にならなくて、ほっとしています。

若干二十三年の人生の中でかくも長い一年があったろうかという期間でしたが、何とか乗り越えました。温かく見守ってくださったみなさんのおかげです。

のみならず転職しました。

ただし新しい職場は前以上に田舎であります。桐蔭学園横浜大学の教務部入試課。桐蔭の名はそれなりに知れてると思いますが、大学まであったなんて多分知らないでしょう。見渡す限りの深い森と広々とした水田。都会イメージがウリの横浜にこんな場所があったとは、地元民の(自慢)私もびっくりです。実際、面接受けるまで知りませんでした。本当にものすごい田舎です。文字どおり、山の中。15分に一本のバス(朝夕は学校対策で臨時バスさえ出るのが唯一の慰め。前の施設は30分に一本しかなかった)で20分ほどの駅周辺まで行かないと、コンビニはおろかタバコ屋、郵便局もありません。購買部(生協はともかく出入り商店すら無い!)が事実上唯一のライフラインなのに、カップラーメンとかが有っても品薄ぞみ。

弁当は10分で品切れ。軟禁状態もいいところです。

別に去年の施設の仕事を嫌になったからとかじゃなくて、(嫌だ嫌だとは言ってたけど晩年はそれほどでもなくなっていた)その、利用者の一人が亡くなったんですね、文字どおり私の目と鼻の先で。三月の頭でした。二十歳目の前にして、てんかんの発作で屋敷吐き戻して、それが肺の中に逆流して。「寝たきり」の最重度重複(身体+精神)障害者でした。で、私はそれを目の前に見ていながら、何もできなかった、と。その時ほど自分が能無しの間抜けに思えたことはなかったですよ。何やかやで私ら職員に原因はなかったらしいんで、(というかもはや不可抗力だったらしい)結局そういうことがないように私らいたはずなのに、というわだかまりが残りましたね。

その少し前に桐蔭の試験は受けてたのですが、その「事件」で決心が固まりました。次は自分が「殺す」ことになるかもしれない。そんな恐怖を抱きながら、なお人の命を直接預かる仕事に就くには、相応な覚悟と根性がなきゃ務まりません。そういつた裏付け無しに「後ろ向き」に足を突っ込んでしまった自分を恥ずかしく思っています。

他にも別の利用者の保護者と意志疎通を欠いて折り合いが悪化したり、いろいろ原因はありまし

たが、結局のところその事件が「辞めよう」から「辞めなきゃ」への、ごくわずかな、そして大きな変化の契機だった訳です。しかしながら、施設長に退職願を持っていった段階ではまだ桐蔭から採用とも何とも聞いてなかったので、今にして思えば無茶をやった訳で。随分参ってたんだなあ、と思います。

でもいまはしあわせ。

(C)ぶれいりーどっくちゃん)

とても比較にならないくらい、精神的にも肉体的にも快適な毎日です。

話は変わりますが、私がそんなこんなで世事から全く隔絶していた間に、わがSG研は「ときメモ」「エヴァ」「ギャザ」の絨毯爆撃を浴びていたのでした。私はそのどっちにも全然手を出していません。「ときメモ」については私が「ギャルゲー-鋼国路線」を嚴重にしているのが周知徹底していたのでそれほどでもなかったのですが（それでも時々「抜け荷チャージ」をかける奴がいるので困る）、「エヴァ」は凄かった。もう問答無用で「見てるでしょ？」だもんなあ。私がそんな奴に見えるでも、．．．見えるか。(笑)

般若真経に誓って私はまだ見てません。偏ったサイド(綾波)から偏った情報は来てたんですが、それだけです。しかしながら今さらダビングの手配するのは、．．．泥縄でしかないですな。いやしかし、キャラ名のガイダンスを受けたときには「やめてくれえ！」状態だったんですよ、マジで。軍艦の名前片っ端から使ってたもんなあ。そこまでやるかガイナオクス。様名が出なくて良かった(嘆息)。碓の名が出たときに心臓止まるかと。考える事はみな同じ、でか？

．．．でまたしても遅れた訳ですが。(ほとんど恒例化している、．．．(T\_T))

一つは去年の暮れから本格的に始動していた(動機は曖昧としていたが)転載大作戦で、資金的にも心理的にも余裕が無かった。今年は成績良好で、桐蔭の前にも二社ほど、ビジネス系のコンピュータ・サポート会社で内定を取りました。もともとこれらはこっちの方で怖じ気づいて、内定辞退という形になったのですが、．．．まあ、ベンチャー企業の技術営業が務まるような柄じゃあないので、履歴書出したのがそもそもの勇み足だったんですがね。

もう一つはWin 95騒動。笠電にも書きました。が、冗談抜きで文字どおり動かなかったんであります。今はもう原因も対策も特定できたので、再

現しようと思えばできます。しかしもううんざりです。「いまさら3.1に戻れるか」って意地もあったし、そもそも「95が動かないなら3.1も動かないはずだ」「3.1が正常動作してるんだから95が正常に動かないはずが無い」って思い込みが有りましてね。もう、まるっきり203高地でしたよ。今でも起動時は五回に一回、終了時は三回に一回フリーズするんですが、その程度ならかわいいもんでしょ。あとは可及的速やかに上限まで(HXの場合63.6MB)上げるまでです。もっとも、それ以前に各方面への借金を完済しないことには道義的にどうしようもないので、そっちのほうが先なんですよどね。とりあえず動いてるんだから。次の給料で返す、田中氏。

ようやくWord Proの習熟にとりかかった所です。Ami Proに比べて、機能も増えただけでやさしさは倍増。書式設定のシステムが不可解の上なくて、この調子だと7太郎使った方がはやいかもしれません。五太郎/Winはお行儀が悪すぎて、95環境では恐くて使えないし、次善の策としてはJW2環境に戻って(=Winを勘当してDOSと復縁する)五太郎/DOSをいじめるって手もありましたね。．．．入手方法が通常と異なるので、ハードディスクに再展開して使用可能な状態にするのが、死ぬほど手間なんですけど。

しかしまあ、何といっても、気抜けしてしまったのが第一でしょうね。卒業決まって、定職に就いて。三月末の一週間くらいは、本当に魂が抜けたみたいにはうっとなってました。後の一ヶ月はその余韻と、リカバリーへの焦りがごっちゃになって、何がなんだかわかんないうちに過ぎたし。でも「占領期間」は過ぎたのかな？神武景気はいつになるやら。

今度の締め切りはとりあえず6月30日。しかしまだ本調子でないので、半月ぐらいのずれはOKでしょう。お代は例によって自由です。

ゲーム時間も実時間と同じ、6月です。特に行事の予定は有りませんが、7月に小田水との試合が予定されています。

なお、予定では「真鶴」はあと三回、つまり6、7、9月しかありません。9月のターンは「その後」として扱っつもりなので、事実上は残り2ターンです。

何にしてももう少しまともに発行したいですね。．．．(嘆息)



# 復活の笠原電腦診療所

お久しぶりの笠原でーっすっ！

ここどこ往診一本の診療所だったんだけど、ようやく外来さんが来たのでちよびりキ入ってマス。世の中みーんな Windows 95 の話でもちぎりで、ワタシの所にもよく「それ系」の質問が来るんだけど、ちつわ EPSON の 95 って2月26日にならないと出ないんですネ。しかも「NEC版は動かない」ってメーカー自らアナウンスするくらいだから怖くて手が出せないし。

近況報告でじらすのも何なので、早速本題行きましょか？

## 京都府 HKさん(PC-9821 Ce2)

Q1:486SX / 25 MHzの RAM 9.6 MB、HDD 170 MB というスペックではどういう風に改良するのがベストなのか。ODPをつむ方がいいのか CPU 自体をごっそり変える方がいいのか。買い変えた方が早いのか。どれがいいのでしょうか。

A1:酷かも知れないけど 486 / 25MHz って、既に製品寿命尽きてるんですよ。Windows 95 も「386SX / 25MHz 以上」って言ってますけど、実用的なスピードは「486 / 33MHz」が最低ラインらしいし。だから Win3.1 をそのまま使うなら現状で充分でしょうが(敢えて言えば RAM をあと 4MB) Win95 を使うなら本体買い替えか ODP 追加が現実的。

さて ODP 追加と CPU 交換は「どちらか一方」しかできません。つまり、本体マザーボードにプロ(C) ODP)ソケットが有るタイプは CPU 交換ができなくて、CPU が取り外せるタイプはそれ用の ODP しか使用できません。

Ce2はどのタイプでしたっけ？たしか CD ドライブの下辺りに CPU が有ったと思うので探してみてください。ただ 486 以上になると放熱板やファンがかぶせてあったりするので、例のインテルマークだけを探すと判らないかも。でも ODP ソケットを使うタイプだったと思います。CPU のそばに「OverDrive Ready」ってエラゾーに書いた空のソケットが有るはずだから、これも探してネ。

Pentium ODP を使うと、けっこう事態は変わってきます。とりあえず日本橋とかで機種言って、使えるタイプの(全部で四種有るので素人判断は事故のもと)やつ買った方がいいでしょう。少なくとも、菊ちゃんの DX2 は Ce2 には止めという方が無難。「それでも使う！」とゆーなら止めませんが、「どーしても Ce2 」という前提で私なりの改造案を挙げます。予算的な面にも一応配慮しましたが、理想論の方が強いので適宜妥協してください。

1. CPU : i486sx/25MHz > Pentium ODP
2. RAM : 9.6MB > + 8MB
3. HDD : 170MB > + 1GB SCSI 外付け

菊ちゃんは ODP 入れて「体感速度5割増」(当社比)だそうですが、それは DX2 / 66MHz を基準にしているからで、SX / 25MHz 基準だと別機みたいな感じになるかもしれませんね。もつともここまで投資するなら、新しいのに買い変えた方が安いでしょう。「最強のゲーム機」Ap2なんか中古で高くても10万円台だし。

Q2:メモリ不足に関連しての事なのですが、RAM ダブラーはどの辺まで使えるのか？聞いた話では複数の作業をさせるのにはもってこいだという話を聞いた事がありますか。

A2:実装メモリを擬似的に二倍にしてしまうのが RAM ダブラーですが、私はこれはお薦めしません。Mac 等では割と普通に使われているような噂も耳にするけど、やっぱり結構トリッキーな事をやっている訳で、相応のリスクも覚悟しないとダメ。

Mac はソフトがハングしてもハードが謝ってくれる(らしい)ので原因の特定も比較的楽らしいけど、Win でディスクキャッシュを利かせてハングなると事になると、運が悪ければハードディスクごと吹き飛ばす危険が在るんですね。

さて、ここで覚えてて欲しいのは、「Win アプリは XMS を使い、その実行速度は空き XMS に影響される」という見過ごされ易い事実。常駐 Win アプリが増えるほど当然空き XMS は減少し、XMS が不足すれば HDD 上のスワップファイルへ当座使わないデータが書き出されるから、HDD 読み書きの分遅くなる理屈。

また、RAM ダブラーはあくまでも Win 上しか効果が有りません。それで充分なのですが、この事はただでさえ重い Win のシステムに更に負担をかける事にもなり、あまり感心しません。更に言えば Win の RAM ダブラーは、実装メモリより先に不足し易い「システムリソース」という領域を擬似的かつ強制的に増やしてシステムをだますタイプなので、実装メモリが根本的に少なければあまり意味がない上に動作を不安定にしてしまうのです。

まあ、充分なメモリが有る上で大型アプリをいくつも同時に立ち上げるような特殊環境でもない、あんまり意味がないのね。

Q3:今使ってる一太郎は Ver.5 ですが、だいぶ前に出た Ver.6.3 やもうじき出る Ver.7 はどの程度印刷技術が向上しているのでしょうか？当面インターネットはやらないつもりです。ついでに言うとう Windows 95 を搭載している訳でもありませんので、そういう機能は使いたく使わないと考えてください。どこまで一太郎は使えるのでしょうか？

A3:最近往診でも多いのがこの手の質問で、そのたびに私はメーカーの「洗脳」を打ち消すのに躍起になる羽目になるんですけど。

はっきり言いましょう、ワープロとして見たら一太郎は「Ver.4.3」(当然 DOS 用)の最終ロットが最高、少し贅沢して Ver.5.Win。その後は蛇足。歴史を追ってくと、

- Ver4.3 の画面を「紙」に近づけてより直感的にしたのが Ver.5。
- Ver5 を拡張してグラフィックに強くし、更に DTP 的側面を押し出したのが Ver6。
- Ver6 に自前のパソ通「Just Net」接続機能を付けたのが Ver6.3。
- Ver6.3 を「Windows 95対応」に作り直したのが Ver7。

明らかに Ver6 系は Ver7 までの「つなぎ」でしかないのね。無理に買う必要はないって繰り返しアナウンスしたので、プリインストールでもない限り私の周囲にユーザーはいません。ただ Win 95 最大のウリであるロングファイルネームは Ver5 では使えないから、そういうコトを考えるなら Ver7。

なお、印刷技術の面では「バージョンアップによる向上」など有りえません。解像度はプリンターに依存しますし、フォントも Win 版は Windows が管理するので関係ありません。印刷行為そのものも、ソフトではなくプリンタドライバに処理が渡されるのが Win です。

純然たる文字編集能力(版形、縦組み横組み、字数)に至っては「初代一太郎」Ver3 から進歩などないに等しいし、せいぜいこま機能追加が見られる程度。

Ver6.3 以降の通信機能は言語道断もいい所で、本来専用ソフトに任せるべき部分を中途半端な「おまけ」によって価格的上げを図ったと見て良いでしょう。Ver7 のインターネット・ホームページ作成機能も、一体どれだけの人間が使うか考えたらすこぶる疑問な機能でしょう。もっとも同人屋に使わせたら新たな形態の可能性も出てきますが、ネ。

大体がジャストシステムのソフトって全般に「強引 My Way」で、他社ソフトと相性が悪い傾向があるので、嫌いです。DOS 時代ならともかく、「共用」が当り前の Win にまでそれ引つ張るんだから。(=\_=)

## 小田原市 MEさん

Q1:システム・アドミニストレータって何ですか？

A1:うっ... (一一)

横で菊ちゃんが腕組みして泣いてますが放っておきましょう。ちゃんと説明しないのが悪いんです。ちゃんとちゃんとの味の素。

これってその筋では「シスアド」って呼んでますけど、結構新しい資格です。「模範的回答」だと、「現場においてエンドユーザ・コンピューティングの推進に従事する技能を有する者」って事になってますが、何のことも解りませんね。ぶっちゃけた話、いわゆる SE とかとは違ってプログラムの開発・維持はやらないで、ただひたすら「コンピュータ」を「どう使うか」の技能に長けた「おたく」の国家認定資格です。「パソコン」に限らず、「コンピュータ」と名のつくものなら何でも守備範囲、と云うことになっています。だから企業なんかで新しくシステムを導入する時なんかには仕事書も書いたりできるし、業者が持ってくる提案書を「ここはぼったくりだ！」と攻撃したりできるわけですね。

まあ菊ちゃんの現段階ではせいぜい「便利なパソコンおたく」程度の意味しかないと思います。とりあえず「ブラックジャック」から「赤ひげ」に昇進、てとこですかね。

ところで、

「平成7年度秋期情報処理技術者試験において、第2種を受験しましたが、無事合格しております。やったね！」(神奈川県・曾根田成弘さん)

だって、やったね！

以上、ちよびつとだけ(当社比)チバレイ入ってる笠原弘子でした。

## 嘆息の笹原電腦診療所

いやあ、困っちゃいましたよ。いきなりなんですけど。

EPSON 版の Windos 95、CD-ROM 版のリリースが 3/15 に延期になったようで。もともと 2/26 でそれすら許しがたかったのに、こりや一体どう訳でしょう。理由がまた客をナメてて。CD-ROM 版に注文が集中したってあんな、もともとユーザーへのバージョンアップしかないのに、そりやないでしょう。CD-ROM ドライブがここまで一般化した今日、しかもマニアックなユーザーが圧倒的多数の EPSON で、CD-ROM 版が出るといいうにわざわざ何十枚もの FD 版を導入する奴がどこに居るんだか。マーケティング・リサーチの貧弱さがもろに出てますね。もともと、ソフト業界に付き物の「延期」のための口実かもしれない。とにかく、メーカー自身が「NEC 版は EPSON 機に使えない」とアナウンスしている以上、しゃきとして欲しいものです。

さて、そういう次第で EPSON 機が席捲している国鉄は相変わらず 3.1 環境なんでありませう。にもかかわらううちに来る患者は 95 の比率が指数関数的に増大する一方。就職の面接じゃ「95 使ってますか」が定型句になってるし。やれやれです。

そんなこんなもあって、今回はこれを踏まえた私なりの「電腦随想」です。

DOS/V 騒動も一段落したようで、「早い、うまい、安い」と三拍子揃っていたはずの「輸入品」もそれ程安くなかってしまいました。国鉄の DOS/V 導入計画もいつの間にか後輩から 98 の NL/R (新品の時自分で買わせた) を下取り価格で買ひ叩くという安直かつ非道な所に落ち着く有り様。... 終わってますね。しかもほぼ V<sub>2</sub> 専用機に成り下がってて、Windos の W の字も出てきません。もともと 120MB しか HDD が無いじゃあ、Win なんて見栄でそれとく程度しか実用上できません。せいぜい秀丸を付けとく程度が関の山、それだったらわざわざ Win にする必要も無い訳で。第一モノクロ液晶ですから、カラーが前提の Win 環境は使いにくいことこの上ないので。マシンを買う時は今やこの辺まで考えないと、後で後悔するという時勢。車のように、二三十年前のモデルと今のモデルで「走る、曲がる、止まる」という根本の部分はそれほど変わらない、て具合には行かないものでしょうか。しかも車なら相当古いのに乗ってても「趣味入」程度で済みますが、コンピュータは変人扱いされるのがオチ。これは 98UV を未だに使ってる某師を引き合いに出すまでもありません。

Win ついでに更に書くところ、あの「95」は非道を通り越して外道であります。... 実はこれを書いているうちの三月半ば 95 が届いたんですけど、一ヶ月近く経つ今になってもお(文頭からここまで)に一ヶ月以上かかっていることに注意)まともに動きません。原因はいろいろ考えられるんですけど、それにしつって、ねえ。これじゃ売り物の「過去の資産が利用できる」なんて嘘つ八もいいところ。少なくとも、14.6MB オーバーの RAM が使えない「本家」98 では、95 は使わない方が賢明でしょう。目一杯まで RAM を増設して 3.1 を使うか(少なくともワープロや表計算を使うだけならこれで充分すぎるほどです)、いっそ本体ごと買い替えちゃった方がいいです。

ちなみにいろいろいわれる 95 の「推奨環境」ですけど、今までで得た「血と汗と涙の結晶」は以下の通りです(別に 100% 実現した訳ではない)。

- CPU : Pentium / 75MHz
- RAM : 32MB
- HDD : 1GB / Drive
- Display : 1024x750 - High Color - 17in

最低限これだけは満たしてないと、どうしようもなさそう。根拠は以下の通り。

まず CPU ですが、うちの Pentium ODP / 83MHz で、どうにか 486DX2 / 66MHz + 15.6MB 時代の 3.1 と同等レベルの反応速度を達成しているのが実情。具体的には「そこらのオアシスと同レベル」といったところ。DX2 / 66MHz でもそんなに不満はなかったのですが、まあこんな所でしょう。RAM の方は深刻で、実装 28MB の国鉄のシステム(DOS 時代と計算方法が異なることに注意-メイン+拡張メモリという概念が無くなるので)ですら、アプリを何も使わなくても、10MB 近く常時スワップアウトしています。今やディスクスワップを極力減らすのが高速化の秘訣ですから、多少 CPU でけちってでも、メモリには最優先で資金投入すべきです。欲を言えば 64MB くらいは入れたいところですが、メモリの高値は相変わらずなので、この辺で妥協しておきましょう。

ハードディスクもメモリほどではないのですが、深刻です。スワップ分を考慮に入れると、500MB 程度では OS と他にアプリ 100MB が限界。今までと違ってぎりぎりに使おうとすると恐ろしいほどに動作が不安定になります。

ディスプレイが一番妥協できそうな分野。でも 17in ディスプレイは必須でしょうね。800x600 以上の高解像度を 15in 以下のディスプレイで見ようとする、文字が異常に小さくなる(文庫本のルビ並み)で眼が悪くなること請け合い。でタスクバーから何かあられこれアイコンが並ぶので、できるだけ高解像度(=広い画面)の方がいい、と。こともあろうに今回は壁紙どころかアイコンまで多色表示を前提とする傾向が有るので(技術の無駄遣い)、100歩譲っても 256色環境は絶対。

今のところ国鉄で達成できてないのはメモリだけなんです。EPSON機はただでさえレア傾向が強いので、内部増設は日を追って困難の度を増してる訳です。それも指数関数的に。困ったもんです。

さて、ハード買い替えとなると問題になるのが「今まで HDD にぶち込んでたデータはどうなる？」という事。結構色々あったりして厄介そうなのですが、実のところそうでもありません。一番単純なのは必要なファイルだけフロッピーにコピーして、新しいところへ移す媒介にする方法。標準で付いてる RS-232C 端子で二台をつなぐ方法も有るには有りますが、フロッピー一枚分の転送に10分かかかる(9600bps)事を考えるとあまり実用的とは言えません。LAN をこのためだけにつなぐのも余り実用的ではないので、根性は要るものこれが一番手っ取り早いですね。

外付けハードディスクを使ってるなら話をもっと簡単です。ケーブルをつなぎ変えておしまい。何も考えなくてOKです。稀にメーカーが違うとドライブが認識できないというトラブルが有りますが、この場合は SCSI ボードを二枚同時に入れるというヤクザな方法も有ります。ただし常時これをやると予期しないエラーの原因になりかねないので、止めておきましょう。必要なデータを待避し終わったら、使う方のボードにつないで、改めてフォーマット。そしたら後は今まで通りに使えます。

さて、前節から更に半月が経ち、どうにかWin95は動くようにはなりました。しかしながら... SCSI-2のボードはネイティブのドライブを組み込むと RS-232C ポートに異常が出るし、それ以上に SB16との相性がゲキ悪いようで！チューチューマウスが金属音を立てて走り回るのには閉口。MIDI は普通に鳴るので、どうやら WAVE のほうのドライブが組込みからおかしくなっているようです。他にもスキャンディスクをかけようとするやとハングアップするし、まだ怖くて「お仕事」には...

これもどれもみんなメモリ不足のせいですかね。まさかフリーメイソン、いや、ネオナチの陰謀？「引きつって、お仕事」「ストレスなんて、知ってる」。思い知ったかマイクソフト。

まあ確かに(-\_-)、あのクソいいまいしい「スタート」のボタンはあ、私の世界を変えましたけどー!?

更に一週間経過...

ようやく Win 95、本格稼働(?)です。動作異常全くなく、至って快調。WAVE の殺人音波も嘘のように消え去りました。手法は... あきれて物も言えない。EPSON 用ドライブキットの中に含まれていた、たった一つのファイル。説明書によると「16MB システム空間を利用するグラフィック・アクセラレータのためのドライブ」となっています。要は、EPSON 機は 16MB の辺りのシステム空間を切り離す(システム予約)か否かの設定ができない(純正機はできる)ので、14MB オーバーのメモリを積んでいる場合こんなものが必要になる訳で。「金持ち病」といつてしまえばそれまでですが、しかし... 「青い鳥」ですね、全く。まさか SB がそんな所を使ってたとは知らないし(3.1 時代はなんともなかった)、説明が「グラフィック・アクセラレータ用」ともっともらしく説明してるし。「まさか」と思って試したところこの結果に、私や一瞬ぶち切れかけましたよ。

あああ、自己嫌悪。

かくしてようやく「真鶴」は再開の運びとなった訳です... 一度ならずテキストファイルベタ打ちで強引に発行しようとも考えた、「国鉄(空廠)の一番長い日」でありました。皆さん本当にごめんなさい。

# 平身低頭

平成8年5月1日

笠原和子